

# ウィリアム・バード (c. 1540 - 1623) による鍵盤ファンタジアの作品構造

## — 多様性の中にみられる共通性 —

[自発展開型]

経済学部 3 年 26 組 川上楨二郎

指導教員：石井明

本研究は、ウィリアム・バード (William Byrd) (1540 - 1623) の作曲した鍵盤楽器のための ファンタジア (Fantasia) 全 10 曲の分析を行い、これを通してバードの鍵盤ファンタジアに見られる構造的な共通性を明らかにすることを主な目的とする。分析の結果、バードの鍵盤ファンタジアには、次の 3 点の構造的共通性があることが明らかになった: 1) 基本となる音価の段階的変化, 2) 声楽的な部分と器楽的な部分が対になった 2 部構成の独特の楽曲形式, そして 3) 広義の調性的設計である。

ファンタジアという単語は、想像 (imagination) や、想像の産物 (product of imagination) を意味する。このファンタジアという単語が音楽的な意味として使われ始めるのは 15 世紀末であり、1520 年までにはドイツの鍵盤楽器の手稿譜の中で、楽曲の題名として既に登場している。楽曲としてのファンタジアは、形式的な束縛がなく、作曲者が自身の想像力と技術を自由に駆使して作曲する器楽曲を意味する。ファンタジアは 16 世紀中頃には、主にイタリアの作曲家によりある程度楽曲ジャンルとしての概念が確立され、その後各国にその流れが伝わっていった。(『ニューグローブ世界音楽大辞典, 講談社, 東京, 1993.』)

ファンタジアは作曲者間で特定の形式が認識されていたわけではなく、また同じ作曲者によるファンタジアであっても、それぞれの構造が統一されているとは限らない。しかし、バードの鍵盤ファンタジアは、それぞれの曲が多様性をもちながらも、一方でその全曲において、強い構造的な共通性を見出すことができる。更に言えば彼の鍵盤ファンタジアは全てがこの構造を基盤として作曲されているのである。注目すべきことは、本研究の分析で明らかになった、3 つの構造的な共通性である、基本となる音価の段階的変化も、声楽的な部分と器楽的な部分が対になった 2 部構成の独特の楽曲形式も、広義の調

性的設計も、その全てが楽曲に構造的な秩序を持たせるものであるということである。基本となる音価の段階的変化は、速度感を上げることによって曲を最初から最後にかけて少しずつ静的なものから動的なものにするというという役割を果たし、曲を単調なものから遠ざけている。声楽的な部分と器楽的な部分に対になった2部構成の独特の楽曲形式は、中でも例えば主題に関連性、発展性を持たせることは、模倣セクションごとの結びつきを強め、結果として楽曲全体に秩序を持たせる役割を果たす。そして広義の調性的設計は、明らかに曲全体に調的な安定感をもたらす。すなわちバードは鍵盤ファンタジアに構造的な秩序を持たせるために、このような独自の構造を全ての作品において、意図的に用いたのである。